

統語変化と意味変化の連関

一 (間) 主観化の逆行例の観察から¹

東京大学大学院生 北崎 勇帆 きたざき ゆうほ

1 はじめに

- 「文法化」(以下、「機能語化」とする)と「(間)主観化」は、(1)のように同時に起こり、半ば並行する現象として捉えられることがある。
 - a. In the view and account taken of the captives there were some of them known to be Tusculanes, who were shed apart from the rest.
b. Apart from some inherent nastiness in the story there is a fundamental weakness in its theatrical statement. (秋元 2011 : 99)
c. apart (副詞) + from (前置詞) → apart from (談話標識)
d. 具体的・客観的意味 → 主観的意味
- が、前者は機能変化に、後者は意味変化に関わる変化類型であるから、これらは本質的には独立する変化である。
 - (2)は機能語化した形式がその内部の意味変化として「主観化」を起こす事例(青木 2011)。
 - a. ながの在京なれば, [金を] つかひきつて, あたいが御ざなひによって, いたさうやうがおりなひ (虎明本狂言集・鏡男 [1642 写])
b. 恐くて見キラン (九州北部方言・以上, 青木 2011 : 114-115)
c. アスペクトの意味(客観的意味) → 可能(主観的意味)
- 日本語においては、機能語化に伴う脱範疇化(decategorization)が起こる際、その統語変化のあり方に制約のあることが知られている(小柳 2016b)。小柳(2016b)では、内容語(や付属的機能語)から付属的機能語が生産される場合には(3a-c) 接続後部で、内容語(や自立的機能語)から自立的機能語が生産される場合には(3d) 句頭部で機能語化・多機能化が起こるものと指摘される。
 - a. 複合語後項部: 複合動詞, 複合形容詞
b. 被連体修飾部: ~ところで, ~くらい, ~はずだ
c. 機能語後接部: をして, において, とともに, たり(てあり)
d. 句頭部: よって, したがって, したり(感動詞), くそ(感動詞)(小柳 2016b 抜粋)
- 他方、小野寺編(2017)などの一連の「周辺部」(Periphery)研究は、語用論的調節

1 本発表は科学研究費補助金(特別研究員奨励費 課題番号 16J00119)による成果の一部である。

を伴う言語変化の発生位置が発話頭や発話末に偏ることを示すものであり、意味変化と統語的な環境の関連性を示唆する。

- 本発表では以上の前提に基づきつつ、これまでに注目してきた「主観化」「間主観化」の逆行例について、類似する現象と併せて、特にその統語変化との関連性について考察を行う。

2 主観化と間主観化

- 概略、主観化は意味が話し手向きになる変化、間主観化は聞き手向きになる変化であり、(4)のように定義される。
- 以下(5, 6)の観察は、間主観的意味が主観的意味からも非主観的意味からも発生し得ることを示す。「話し手向きになる変化」と「聞き手向きにある変化」は別個の変化であり、(4c)のような直線的な関係として見るよりは、「非話し手依存→話し手依存」、「非対人的→対人的」の別として考えるほうがよい。
- 以下、小柳(2014, 2016a)に従い、話者の発話時・発話場に拘束されるようになる変化を「主観化」として扱い、「間主観化」は「対人化」とする。

(4) a.subjectification is the mechanism whereby meanings come over time to encode or externalise the SP/W's perspectives and attitudes as constrained by the communicative world of the speech event, rather than by the so-called 'real-world' characteristics of the event or situation referred to. (Traugott 2003 : 126)

b.Intersubjectivity is the explicit expression of the SP/W's attention to the 'self' of addressee/reader in both an epistemic sense (paying attention to their presumed attitudes to the content of what is said), and in a more social sense (paying attention to their 'face' or 'image needs' associated with social stance and identity). (Traugott 2003 : 128)

c. nonsubjective > subjective > intersubjective (Traugott & Dasher 2002 : 40)

(5) [主観→間主観 / 非対人→対人]

a. 丑剋ばかりに、又先のごとくに浄衣装束なる男二人来って、「はやノ、参らるべし」とすゝむるあひだ、閻王宣を辞せんとすれば

[[「さっさと参上するのがよい(→参上しなさい)」と勧めるので、]

(高野本平家物語巻6 慈心房 [13C])

b. 「太郎くわじやがつらが、おにであらふ子細が有か、急でいなぬか

〔急いで立ち去らないか(→立ち去れ)〕

(虎明本・抜殻 [1642 写])

(6) [非主観→間主観 / 非対人→対人]

a. そこに座る！／さっさと歩く！（動詞終止形）

b. そこに座ること。（形式名詞こと）

2.1 主観化と統語変化

- 「主観化」そのものの有効性が限定的であることは青木(2011)、小柳(2014)によって指摘されており、発表者も同様、その逆の変化の事例が容易に見出せること、また、そもそもその変化が一方向的である必然性が説明できないことから、「主観化」が一方向性を持つものとは考えていない。

- しかしながら、例えば推量の助動詞や文末形式の発達（三宅 2005「名詞の助動詞化」、青木 2007「外接モダリティ形式の成立」）は、当該形式の使用が話し手の発話時・発話場に依存するようになる変化であり、これは「主観化」と呼んでよいものであろう。これらは、出現位置が文末に固定されるという点で、統語的な制約も同時に発生しているものと言える。
 - げな（青木 2007）、ようだ、はずだ、ものだ、つもりだ（川島 2017）、気だ（川島 2018）
 - とおぼゆ、と思う（渡辺 2007, 2015）、気がする（藏本 2018）

2.2 対人化と統語変化

- 行為要求以外に用いられる形式が行為要求表現を表すようになる一群がある。この変化に伴い、行為要求が行われる位置である文末への固定が起こる。
 - 評価形式、条件形式+評価、話し手の希望といった形式によるものは「こうあるべき」「こうあってほしい」ことを聞き手に投げかけることによって実現する用法。動詞終止形や「こと」のような素材提示も非主観的な意味が対人的に使われるものである。
 - (7) a. 丑剋ばかりに、又先のごとくに浄衣装束なる男二人来ッて、「はやノ、参らるべし」とす、むるあひだ、閻王宣を辞せんとすれば、甚其恐あり、参詣せんとすれば、更に衣鉢なし。
(高野本平家物語巻6 慈心房 [13C])
 - b. 声ハ、声楽ヂヤホドニ、声ト読フダガヨイゾ。古本ニ声トモ、点シタガアルハ、誤タゾ。〔声の字は、コエと読むのがいい〕
(史記抄・秦本紀 [1477])
 - c. ねなんしたかと云て来たらばどふして独でねられるもんでごぜんすなんぞといふがいに
(深川新話 [1779 刊])
 - d. きいたふうをせずと、生得はたらきのねへむまれつきで、三文のくめんもむづかしうござりやすと、しらでいふほうがい。
(傾城買二筋道 [1798 刊])
 - e. 此所へ呼び、私が御意見を申、その上でお渡しなされたらよからふ
(けいせい浅間獄 [1698 演] 矢島 2008 : 61)
 - f. 「熱をお計りになったら」「ありがとう」彼は武子の親切をありがたく思った。
(武者小路実篤 [1885 生]『友情』[1919 初出] 森 2015 : 58)
 - g. 各命令や各箇条の終りに於けると同じく‘てには’ (Tenifa) として、或いは又、区別する為、箇条書きや要領書きの終りにこれを置く。この言ひ方は盛に使はれる。例へば、Midarini fitouo corosu becarazaru coto. (濫に人を殺すべからざる事。)
(日本大文典第2巻・事物を意味する助辞 [1604 刊])
- 動詞や指示詞、副詞といった語の呼びかけ感動詞化も、出現位置が文頭に固定される点で隣接する現象として捉えられる。
 - (8) a. 申し、あのやうに、男に向ひて、物をぬかす物で御ざるか、とかくあの棒をこちへ取つておこいて下されいと云^{シカハ}
(天理本狂言六義・腹切らず [1624-1644 写] 深津 2013 : 19)
 - b. それノ、と御ちやうあれはかしこまつて候とて

(天正狂言本・うちみ [1578 写] 深津 2014 : 112)

- c. これおどれ。なに事しおつたぞ (版本狂言記巻3・どぶかっち [1660 刊] 深津 2010 : 10)
- d. 「なんと、ミなの衆。あれを聞^きれ。鳥類でさへ元朝を祝して、おれその儀式をする (会席噺袋 [1812 刊] 深津 2018b : 41)
- e. この上はあこぎながら、とてものことに今こゝで、ちよつと／＼と、縋りしを、聞分けなやと、逃げ回る。 (堀川波鼓 [1707 演] 深津 2018a : 223)

3 主観化の逆と対人化の逆

- ・ 「主観化」の逆、「対人化」の逆方向の事例を見る。それぞれの変化が一方的ではないことは既に述べたとおりだが、その「逆」の方向性を持つ変化についても、それが単なる「反例」ではなく、一定の類型性を持って現れる。
- ・ このことを指摘した上で、それらの変化 (の多く) が、文末 (周辺部) から文の内部・節境界において発生することを見ていく。

3.1 主観化の逆

- ・ 主観化の逆方向の変換事例については青木 (2011) に方言における助動詞ゲナ (←ゲナリ) の副助詞的用法の派生が、Kinuhata (2012) に間接疑問文の成立が挙げられている。いずれも文末から節境界や文内部への移動が起こっている点が注目される。
 - 前者は文末で伝聞の標示を行ったゲナが述部の前に移動するもの
 - 引用形式となったゲナが否定的特立 (数学なんか嫌い) を派生 (松尾 2009)
 - 後者は文末において直接疑問文を提示していたヤラ・カが間接疑問節を構成するようになるもの
 - ヤラ (高宮 2004), カ (高宮 2005, Kinuhata 2012)
 - 中世後期の間接疑問文以前のもので、過去推量の助動詞ケムによるものの指摘がある (高山 2016)
- (9) a. まごじょーなでけなさったげななー
[お孫さんがお生まれになったそうですが] (青木 2011 : 122)
- b. ナンデ数学ゲナセナイカントー。
[なぜ数学なんかしなければならないの。] (青木 2011 : 122)
- (10) a. 何ト義理ヲ付ウズヤラ知ラヌホドニ (蒙求抄巻4 [1529] 高宮 2004 : 118)
- b. されば何と申事で御ざるか存ませぬ。 (虎寛本狂言・八幡前 [1792 写] 高宮 2005 : 102)
- c. 大原や小塩の山も今日こそは神代のこともおもひいづらめとて、心にもかなしとや思ひけむ、いかが思ひけむ、しらずかし。
[どう思っただろうか、分からない] (伊勢物語 [10C 初] 高山 2016 : 50)
- (11) a. [疑問文 … やら]。[後続文 知らぬ]。 → [間接疑問文 … やら知らぬ]。
b. [疑問文 … か]。[後続文 知らぬ]。 → [間接疑問文 … か知らぬ]。
c. [推量文 … けむ]。[後続文 知らず]。 → [間接疑問文 … けむ知らず]。
- ・ 他の事例として、以下のような「(よ) うと」「まいと」「(よ) うが」「まいが」が、意志文の環境から「ム+トモ」として発生する点で注目される (北崎 2019a 予定)。

- 「(よ) うと」の場合、意志文環境の「～む」が「とも」に包含され、「むとも」で固定化することにより、本来文終止の位置で表していた意志の意を失い、単なる非現実標示形式（高山 2005）となり、意志性・動作主の制約が緩和される。
 - 「(よ) うが」の場合も同様、意志・推量文の「～う」が、逆接条件側で伸長していた「が」に包含されたことを基盤としつつ、上記「(よ) うと」が類推的に適用されることによって成立。
- (12) a. 今ハ万事思サマナレバ、内ニナラムトモ院ニ成ムトモ我心也。
 [今は万事思い通りであるから、天皇になるのも上皇になるのも (←「なる」ことの意志+逆接トモ) 私の思い通りだ] (延慶本平家物語巻4 [13C])
- b. 主はなにと有うとまゝよと云て、利を本にしたぞ。
 [主がどのようにあろうと私には関係ない] (毛詩抄巻4 [1539])
- (13) a. 下から上へ告るがコクぞ。上から下へつぐるはカウの音ぞ。こゝは神へつぐる程にコクとよまうが、されどもどちへも云で候ぞ。
 [[「コク」と読むことの推量+逆接ガ] (毛詩抄巻19 [1539])
- b. 二世とかねたるおつとのさいごをみて、女の身として帰ろふか。我もこわいたけはこはし。こおうないといふてからは ^(駿河) するが丸様でござろうがおにであらうが。へちまのかは共ぞんぜぬ。
 (日本記素戔鳴尊 [1701 演])
- (14) a. [意志文 … む]。
 → [文 [従属節 [(動作主 A が) V む (意志)] と]も], [主節 (A の) 思い通りである]]
 → [文 [従属節 (動作主 A が) V むとも], [主節 (A の) 思い通りである]]
 → [文 [従属節 … うと (も)], [主節 (事態が成立する)]]
- b. [意志推量文 … う]。
 → [文 [従属節 [… う (意志・推量)] が], [主節 …]]
 → [文 [従属節 … うが], [主節 (事態が成立する)]]

3.2 対人化の逆

- 対人的形式がその対人性を喪失する際、「意味が聞き手に向かわない」環境下に置かれることがそのプロセスの前段階として必要となる。行為要求の場合、行為成立の要求を行わない環境で命令形式が用いられることを基盤として、種々の派生的用法が生産される（北崎 2018）。
 - 以下、逆接条件化、順接条件化の例を見る。概略、これらの条件形式の成立は、「命令文によって指示される未実現の事態」が成立した場合の「結果の予告」や、「その遂行に対する話し手の態度」が命令文の後続文として現れることによって、連続する二文が仮定条件文的な構造を持つようになったことによる（北崎 2019b 予定）。
- (15) a. ^{うるは}愛しと さ寝しさ寝てば 刈薦の 乱れば乱れ <美陀礼婆美陀礼> さ寝しさ寝てば
 [刈薦のように乱れるというのなら乱れても構わない] (古事記歌謡 80 [712])
- b. 「誰が車ぞ」と問はせたまふに、「源中納言殿」と申せば、「中納言のにもあれ、大納言にてもあれ、かばかり多かる所に、いかで<この打杭あり>と見ながらは立てつるぞ。少し引きやらせよ」とのたまはすれば、
 [中納言の車であれ、大納言の車であれ、これほど車が多く泊まっているところ

- に、…なぜ止めるのか] (落窪物語巻2 [10C末])
- (16) a. 思ふにはしのぶることぞまけにけるあふにしかへばさもあらばあれ
 [お逢いできるなら、どうなっても構わない] (伊勢物語 65 [10C初])
- b. 人のそしりはさもあらばあれ、とく／＼まいらせ給へ
 [人のそしりはどのようであっても構わない。早く参上しなさい
 →人のそしりはどうであれ、早く参上しなさい] (古今著聞集巻8 [1254])
- (17) a. [命令文(放任) …ば, … 命令形]。([話し手の態度])。
 → [命令文(放任) …あれ]。[後続文 …]。
 → [条件文 [従属節 …もあれ], [主節 …]]。
 b. [命令文(放任) さもあらばあれ]。[後続文 …]。
 → [条件文 (…は) [従属節 さもあらばあれ], [主節 …]]。
- 中世以降, 特に「てみろ」が順接条件形式として定着するほか, 順接条件には (19) のような「なぜかという」とに相当する「なぜといえ」の事例もある。
 - 順接条件の場合も, 対人性を喪失しながら(対人化の逆), 文末から文の内部へ(節境界)へと移動する。意味変化と統語変化の関係性として一定の類型が認められる²。
- (18) a. [饅頭の代金を払えと言われて] (大名)「此御せいたうたゞしひおりから, そのつれな事をいふてめいわくするな, よつてみようちはなすほどに「刀にてヲかくる [寄ってみろ, 打ち放すぞ] (虎明本狂言集・饅頭 [1642写])
- b. 少女「是は又悪ひ合点な衆じゃ。博奕の出合は相対づく。放った所が一生懸命。おれが方が負けて見やんせ。ねごんぞう取られにゃならぬ。
 [俺の方が負けてみなよ, 一切合切取られなきゃならん] (韓人漢文手管始 [1789演])
- c. [爪が割れている動物は足が速いが, 割れていない馬はどうなのだ, という質問を受け]「あれハ爪が割て居ぬから, まだ人が乗られる。あれが爪がわれて見やれ。不断飛ぶやうで, 中／＼人が乗られる物でハない」
 [馬の爪が割れてみなさい, ずっと飛ぶやうで, なかなか人が乗れるものではない] (鹿の子餅 [1772刊])
- (19) いや／＼其方立 侍とはいはれまい。なぜとおいやれ。さいぜん其方がいふには。… [中略, 先に結んだ約束を述べる] …といふたでないか。[約束を違えたことを咎める] (金岡筆 [1690演])
- (20) a. [命令文 よつてみよ]。[替し文 うちはなすほどに]。
 → [条件文 [従属節 よつてみよ], [主節 うちはなすほどに]]。
 b. 話し手 [なぜと言え]。聞き手 ~~[なぜ]~~。話し手 [理由の説明 …]。
 → [命令文 なぜと言え]。[理由の説明 …]。
 → [条件文 [従属節 なぜと言え], [主節 …]]。

2 これもあくまでも一定の類型であり, それが原則として起こるというわけではない。例えば, 「深夜にラーメンは太るけど, 食べちゃえ」のように一人称に向かって「てしまえ」「てやれ」「ておけ」が用いられることで意志の表出を行う用法がある。

4 結論：統語変化と意味変化

- 「話し手の発話場・発話時に依存する意味」からそうでない意味への変化や、「聞き手向きの意味」からそうでない意味への変化は、その意味が解消される構文環境において変化が発生するために、意味変化と連動する形で、文周辺部から文内部・節境界への移動が起こる。
 - 主観→非主観
 - 助動詞の取り立て形式化：引用形式を経由することによる
 - 間接疑問文：文境界（文末）が節境界として読み替えられたことによる
 - 意志推量形式の条件形式化：意志形式の条件句への取り込みによる
 - 対人→非対人
 - 命令形式の条件形式化：文境界（文末）が節境界として読み替えられたことによる
- 機能変化と意味変化は本質的には別個の変化であるがこの点において接点を持ち、特に主観的意味・対人的意味が喪失される際にそれが顕著に現れる。
- 南（1993）に示される文要素・従属句の包含関係と意味の階層性とは同一視すべきものではない（尾上 2001, 大堀 2012）が、統語的階層と意味的階層とが緩やかな関連性を持つ限りは上に見たような現象が観察できる。
 - 「文法化」と意味変化類型との関係性、周辺部研究の理論への寄与
- 課題として、
 - 「文末」のどのレベルに拘束されるか、また、どのレベルの「文内部」なのか
 - ～たらず → なかった / *たない
 - つもりだ → ないつもりだ / つもりはない (cf. 川島 2017)
 - 「(よ) うと」「であれ」「にせよ」はいずれもいわゆる B 類従属句を構成する
 - 他の主要部後置型言語に同様の傾向は見られるか

参考文献

- Kinuhata, T. 2012. Historical development from subjective to objective meaning: Evidence from the Japanese question particle *ka*. *Journal of Pragmatics*. 44. 798-814.
- Traugott, E. C. 2003. From Subjectification to Intersubjectification. Hickey, R(eds.) *Motives for language change*. London: Cambridge University Press. 124-142.
- Traugott, E. C. & Dasher, R. B. 2002. *Regularity in Semantic Change*. London: Cambridge University Press.
- 青木博史 (2007) 「近代語における述部の構造変化と文法化」青木博史編『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房, pp.205-219.
- (2011) 「日本語における文法化と主観化」澤田治美編『ひつじ意味論講座 5 主観性と主体性』ひつじ書房, pp.111-136.
- 秋元実治 (2011) 「文法化と主観化」澤田治美編『ひつじ意味論講座 5 主観性と主体性』ひつじ書房, pp.93-110.
- 大堀壽夫 (2012) 「文の階層性と接続構造の理論」『国語と国文学』89(11), pp.42-52.
- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』くろしお出版.
- 小野寺典子編 (2017) 『発話のはじめと終わり：語用論的調節のなされる場所』ひつじ書房.

- 川島拓馬 (2017) 「近世・近代における「つもりだ」の用法変遷」『筑波日本語研究』22, pp.105-133.
- (2018) 「意志表現「気だ」の特徴とその史的変遷: 「つもりだ」と比較して」『国語と国文学』95(12), pp.53-67.
- 北崎勇帆 (2018) 「間主観化・対人化の逆の変化: 命令形式由来の表現を対象に」『日本語学論集』14, pp.(82)34-(51)65.
- (2019a 予定) 「「～(よ)うと」の一群の成立と展開」.
- (2019b 予定) 「命令形式から条件形式へ」.
- 藏本真由 (2018) 「前接要素・形態的特徴からみる「気がする」の意味変化」『国語語彙史の研究』37, pp.75-90.
- 小柳智一 (2014) 「「主観」という用語: 文法変化の方向に関連して」青木博史・小柳智一・高山善行編『日本語文法史研究2』ひつじ書房, pp.195-219.
- (2016a) 「対人化と推意」『国語研究(国学院大学)』79, pp.左71-84.
- (2016b) 「文法変化の方向と統語的条件」大木一夫・多門靖容編『日本語史叙述の方法』ひつじ書房, pp.55-73.
- 高宮幸乃 (2004) 「ヤラ(ウ)による間接疑問文の成立: 不定詞疑問を中心に」『三重大学日本語学文学』15, pp.124-110.
- (2005) 「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」『三重大学日本語学文学』16, pp.104-92.
- 高山善行 (2005) 「助動詞「む」の連体用法について」『日本語の研究』1(4), pp.1-15.
- (2016) 「ケム型疑問文の特質: 間接疑問文の史的研究のために」青木博史・小柳智一・高山善行編『日本語文法史研究3』ひつじ書房, pp.47-64.
- 深津周太 (2010) 「近世初期における指示詞「これ」の感動詞化」『日本語の研究』6(2), pp.1-15.
- (2013) 「動詞「申す」から感動詞「モウシ」へ」『国語国文』82(4), pp.19-36.
- (2014) 「動作を促す感動詞「ソレ／ソレソレ」の成立について」青木博史・小柳智一・高山善行編『日本語文法史研究2』ひつじ書房, pp.107-129.
- (2018a) 「副詞「ちょっと」の感動詞化: 行為指示文脈における用法を契機として」高田博行・小野寺典子・青木博史編『歴史語用論の方法』ひつじ書房, pp.218-239.
- (2018b) 「近世における副詞「なんと」の働きかけ用法: 感動詞化の観点から」藤田保幸・山崎誠編『形式語研究の現在』和泉書院, pp.41-55.
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探求』くろしお出版.
- 松尾弘徳 (2009) 「新方言としてのとりたて詞ゲナの成立: 福岡方言における文法変化の一事例」『語文研究』107, pp.1-17.
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
- 三宅知宏 (2005) 「現代日本語における文法化: 内容語と機能語の連続性をめぐって」『日本語の研究』1(3), pp.61-76.
- 森勇太 (2015) 「条件表現を由来とする勧め表現の歴史: 江戸・東京と上方・関西の対照から」『近代語研究』18, pp.47-64.
- 矢島正浩 (2008) 「近世中期以降上方語・関西語における「評価的複合形式」の推移」『国語と国文学』85(2), pp.55-69.
- 渡辺由貴 (2015) 「文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」の史的変遷」『日本語文法』15(2), pp.116-132.